中断された二回の電話

唐沢俊一

「ガロ」に作品を載せてもらうようになる以前に、青林堂に電話をかけたことが二回あって、二回とも長井さんが受けてくれている。何で声だけで長井さんだとわかるかというと、ガロの編集部にあのような年配の人は他にいないということを知っていたからであり、さらに、いろんな人が書いているように、そのしゃべり口調が、まるで志ん生のような、芝居かテレビドラマの中に出てくる下町言葉そのままの、独特のイントネーションだったからである。ところが、その電話が二回とも中断しているのだ。

最初は高校のころ、確か限定出版だったさわだとしきさんの作品集を取り寄せるにはどうしたらいいのか、という問い合わせの電話で、札幌の郵便局からかけた。

「何？　札幌からなの？」

と向こうも驚き、こちらの電話代を心配したのか、すごく簡潔に、要領よく、やり方を教えてくれたことを記憶している。その声が長井さんだったろうということは後で気がついた。聞き終って、礼を言おうとしたら、十円玉が切れて、そのままガチャリと電話は切れた。

次は受験で東京へ出てきたときだからその一年後くらいで、試験そっちのけで神田の古書店街を回った。そのころまだ木造の倉庫みたいな感じの店だった源喜堂書店なんかで古本をあさっていると、店頭の雑本の中にマンガを貼り交ぜたスクラップブックがあって、中に、なんかいろいろなマンガに交じって、つりたくにこさんの作品がいっぱい貼ってあった。

これはいい、と思って買おうとしたのだがその本が、どういうつもりか、ガロから切り取ったつりたさんのページを、ノリでベッタリスクラップブックに貼りつけてあり、つまり、ページの片側しか読めない風になっていた。なんであんなスクラップの仕方をしたのか、さっぱりわからない。レジで店の人に

「あのスクラップブック、買いたいんだけど変な貼り方をしているんで買えない」

とか何とか話しかけ、ちょっと話しているうち、店の人が、

「つりたくにこなら、青林堂から単行本が出ている」

と教えてくれた。『六の宮姫子の悲劇』である。どういうウッカリか、僕はそれを知らなかったのだった。

あわてて、新刊書店を何軒か回ったが、青林堂のマンガはたくさんおいてある書店でも、『六の宮姫子の……』だけはないのである。在庫を売り切って品切れだったようだ。注文しておきましょうか、と書店の人は言ったが、東京滞在はその日が最後だったので、何とかその日のうちに手に入れたかった。

それからまた何軒か本屋を回り、最後に行った書店でも無くて、うーん、困った、と思っていたとき、ふと、ここが神保町であることを思い出した。そうだ、青林堂に行けばあるかも知れない、と思いついた。

さっそく、雑誌売り場にあったガロで電話番号を調べ、まず在庫の確認をしようとした。電話をかけると、

「アい、青林堂でございます」

と長井さんの声がした。今度は一発で長井さんだとわかり、ちょっとあがってしまって、ヘンな言葉使いになった。

「あの、いま本屋さんをいろいろ回ったかどなかったんですけど、そちらに、つりたくにこさんの『六の宮姫子の悲劇』、ありますでしょうか、逆に言えばないでしょうか」

「つりたさんの……？　ちょっと待ってくださいヨー、いま、誰もいなくて……」

と、受話器を持って立ち上がった気配があったが、すぐに再び声がして、

「アー、モシモシ、アノネ……わっ」

と、短い叫び声のような声がして、そこで電話は切れた。

いったい、何があったのだろうか。想像するに、受話器を持ったまま立ち上がって近くの棚をのぞき込み、椅子に返ろうととして、何か（新しいガロの在庫か何か）にケツマづき、転んだかバランスをくずした拍子に、電話機が床に落っこちて切れてしまった、そんなところではなかったろうか。

ツーツーと鳴る公衆電話の受話器を持ったまま、このアクシデントに、僕はアゼンとして突っ立っていた。そして、そのまま、再び電話をかけなおすことはしなかった。なぜだか、いまだにわからない。すでに何軒も書店を回って、疲れきっていたのかも知れない。

結局、そのときは『六の宮姫子』はとうとう見つからず、田舎へ帰ってから買った。

あのとき在庫をもらいに青林堂へ行っていたとしたら、そこで長井さんとどんな話ができたか、と思わないでもないが、まあ、人生というのはそんなことの積み重ねで成り立っているのだと思う。

中断された二回の電話が、今は長井さんとの、貴重な会話の記録になってしまった。

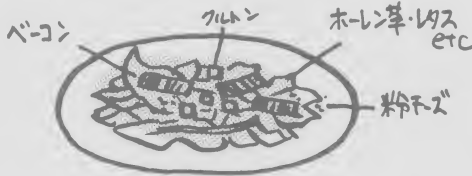
唐沢なをき

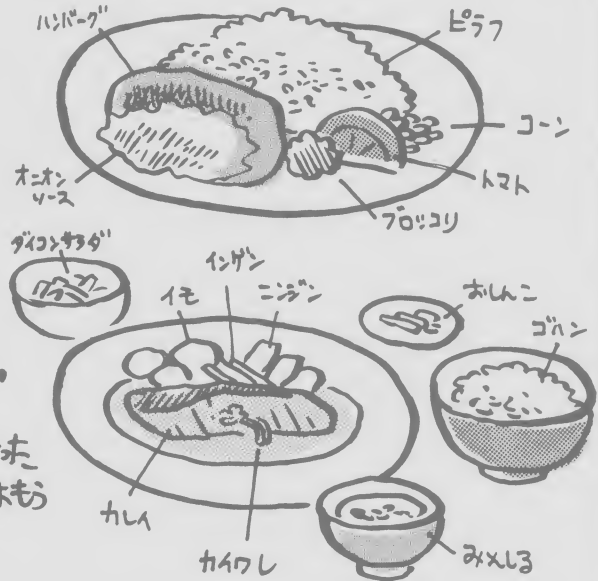
私は阿佐ケ谷に住んで長いのですが長井会長の訃報が届いてはじめて会長の自宅が、私のよくうちあわせに利用するファミリーレストランの上のマンションであったことを知り驚いております。ここではそんな私と長井会長とのつながりを考えてみます。

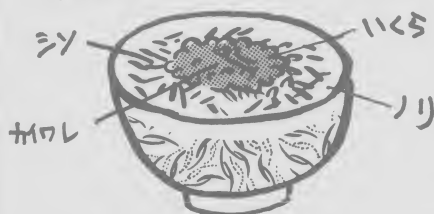
★有機野菜のサラダ　380円

有機野菜とホウレン草とレタスをたっぷり使い特製ドレッシングであえたサラダ。364kcal。これを長井会長の足もとで食べられたのはまったく光栄なことであります。

★ハンバーグピラフ（オニオンソース）　930円

さっぱりとしたオニオンソースをかけたハンバーグとスパイシーな味わいのガーリックピラフを一緒に盛ったボリュームのある一品。1063kcal。これを食べていたときも頭上に長井会長がいらしたとは。ありがたい　ありがたい。

★カレイの煮つけ膳　1030円

たべやすく身ばなれのよいカレイを厳選し、ほどよい甘さで味つけさっぱりとしあげた膳。736kcal。これは某パチンコ誌の編集の人と食べたのですがこのときは夜遅かったので上の階にいらっしゃった長井会長はもう寝ていたのではないでしょうか。

★いくら丼　980円

産地直送の新鮮ないくらを使い、風味豊かに仕上げた一品。604kcal。酒をのんでヘロヘロになりつつ食べたのにあれだけうまかったのは長井会長の人徳なのでしょうね、きっと。

★ハーブケーキ　280円

ローズマリー・タイム・バジル・シナモンの4種のハーブを使ったケーキです。カロリーわからず。某パソコン誌のうちあわせのときに担当の女性編集者さんが食べてました。おいしそうだったので会長を偲びつつ今度食べてみようと思います。

●長井勝一さんを悼む

ちばてつや

長い間、同じマンガの世界に生きながら、残念ながら長井勝一さんとは一度もお話しする機会が無かったし、仕事で関わることも無かった。でも昔から「ガロ」という本が大好きでいつも身近に読んでいて、刺激を受けたり教わる事も多かったから長井さんの物の見方や考え方は本の雰囲気から充分に伝わってきた。生意気な言い方かもしれないが、人間としても、又、物を創作する姿勢としても共感することが沢山あった様に思う。

マンガを描くのに疲れたり、迷ったりした時、古い「ガロ」を開くと、不思議に心が和み、落ちつき、元気になって再び、創作意欲が湧くことがよくあった。他の多くのマンガ家たちも、皆同じ気持ちを「ガロ」に感じていたのではないだろうか。今にして思えば「ガロ」誌は、いや「長井勝一」という人間には、我々マンガ家達や劇画家達の生命の源みたいなものがいっぱい満ちていたのだと思う。つくづくマンガ界は惜しい人を失ったものだ。一度ゆっくりお話を聞きたかった。しみじみと残念でならない。

●さくらももこ

私がガロを初めて見たのは一九八〇年、15才の頃だった。笑いのセンスの嗅覚の良い友人が貸してくれたのがきっかけだ。

当時のガロには丸尾先生、花輪先生、蛭子先生らが続々と新作を発表されており、私は毎号非常に衝撃を受けながら読んでいた。ガロに出逢っていなかったら、私の中にある笑いのセンスのいくつかの方向性は今も見つけることができなかったと思う。

長い間ガロを作ってこられた長井さんへ感謝と御冥福をお祈りさせていただきつつ、今後もガロが新しいセンスの開発の場となり続けますことを心より期待しております。

●困った太陽 長井さん

松井雪子

困った。

新聞で訃報を知り、まず私は困ったのでした。長井さんにお会いしたことがなかったので、お会いする日をただ夢見ていたので、困ってしまったのでした。

もう、お会いできないのだ、困る。

いきなり、「困ります」と言われても、ご迷惑でしょうが。

よわった、よわった。

家族のなかでいちばんに、その新聞を読んだのですが、なんだかそのままそれを誰にも見せたくなくなり、自分のペットのふとんのなかにしまいこんで、「きょうは新聞おやすみみたい」と、29歳にもなって嘘ついて、ひとりで困ったのでした。

自分の誕生日と同じ日に生まれた人よりも、死んだ人のほうになつかしさを感じるほうで、子供の頃はよくそれを調べたりしていたものですが、長井さんがお亡くなりになった1月5日は私の誕生日で、なんだかそんなことになると、喪失感やら誇りに思うやらで混乱してしまい、ますます困ったのでした。

私の「ガロのイメージ」は、実験農場です。

土には湿り気と空気がほどよく含まれて、柔らかくて、いい具合。

そして、その農場には東から西へゆるゆると移動する金色の太陽が恵みを与えていて、よく見るとその太陽は長細くてしわがあり、もっとよく見ると、「長井さん」であったりします。

ええ、土だわい。

ええ土を目のまえにして、どうしてこの農耕民族が鍬を持たずにいられましょうか。なんの理由もいりません。私は発作的にがすがすと畑を耕すだけです。

ええ実なるかな、がすがす。

ミミヨちゃんの実、ええね、がすがす。

どうしたら、うまいこと作れるかいな。

なんだか、失敗は成功のもとという言葉がぴったりの気分で。

この農場の創始者、長井さんは、ありがたい。

なんだか、アーメンより、ありがたや、ありがたやと唱えるほうがしっくりきます。

困りつつも、これを追悼の文とさせていただきます。

●伝説の人のまま…

猪飼幹太（ぱふ編集長）

〝長井勝一〟という名前は、『ガロ』が創刊された、64年にはまだ生まれていなかった私のような人間にとっては、ある伝説の中心に悠然と端座し続けている美しい象徴のようなものだった。その伝説の世界には、白土三平さんや水木しげるさんやつげ義春さんや、あるいは南伸坊さんや渡辺和博さんや糸井重里さんや、といったすごい人たちがたくさんいて、ワイワイやっていて、すごいことになっていた。そして、その中心にはいつも長井勝一さんがいた。私の中での長井さんは、そんな伝説世界の住人だった。

実際の長井さんとは、パーティー等の席上で二～三度ごあいさつさせていただいた。偉

人伝の中の人物と話しているようで、不思議な気分だった。
いつかはじっくりお話をうかがう機会を、と願っていたが、それももう出来なくなった。私にとって長井さんは、ずっと伝説の人のままということになってしまったわけで、たいへん心残りであるし、どこか悔しいというか、自分が情けないような想いもする。
心よりご冥福をお祈りいたします。

●古山啓一郎

まだ単なる投稿者にすぎなかった6年ほど昔、生まれてはじめて神保町の材木屋の2階へと続く長い階段を登り、青林堂と小さく書かれたドアを開けた日の事は忘れようがありません。僕を呼びつけた白取さんは事もあろうに外出中で、しばし待つように説得された僕は、冷たい麦茶を高市さん（だったと思う）から与えられました。
しかし、その麦茶を何気なく飲むふりをしていた僕は、とても心中おだやかではありませんでした。何故ならば、奥のほうの窓際の席に、あの、長井勝一さんがいるのですから。こんな間近に、ひとつ屋根の下に、「神様」がいるのです。胸に心臓の形が浮き出るのではないかと思うぐらいにドキドキしました。麦茶を口に運びつつも、「神様」を少しでも

目に焼き付けたい思いで、チラチラと目を奪われてしまいます。

　ガロに憧れ続けた若者にとって、その雑誌を裸一貫で立ち上げた人物を信奉せずにはいられません。僕にとっては「神様」とも思えるそんな長井さんと、同じ部屋にいるのです。これが緊張せずにいられるものでしょうか。これは、なるべく恥ずかしい来訪者にならぬように努めなければなりません。なにか失礼な事をして、下らない奴だと思われる事だけ避けるようにしなければ。僕は、返本の山から一冊を選んで読むことにし、おとなしく白取さんを待ち続けました。

　永遠とも思える時間がすぎ、目の前を長井さんが通りすぎました。退社時間の5時半のようです。土下座でもしようかと思いましたが、皆さんに交じって「おつかれさまでした」と挨拶することができ、それで僕は大満足でした。おそらく無礼は働かずにすんだので、安心して麦茶を飲み干すことができました。

　しかし後日、2度目に青林堂を訪れた僕は、ほんのちょっとした気のゆるみから、当時完成したばかりの自作のデモテープを持参してきてしまい、それを白取さんに渡すと、「じゃあ今ここで聞いてみよう」と最悪な提案をされ、古びたラジカセで回されてしまいました。あれほど緊張していた初訪問時の努力もむなしく、僕のバカ声が編集部内に響きわたってしまったのです。長井さんのお耳にも入ったかと思うと、恥ずかしくて鮮赤色に顔が染まってゆくのを禁じ得ません。

　しばらくすると長井さんは現役を退かれ、僕が頻繁に編集部にお邪魔するようになってからは1度もお会いできませんでした。こんなバカ男の事はきっと覚えておいでにならなかったとは思いますが、僕は2度も生の長井勝一さんをこの目で見れて、挨拶までできただけで幸せです。どうか安らかにお休みになってください。

●とうじ魔とうじ

　2月13日の「故・長井勝一氏を偲ぶ会」に参加して、あらためて長井さんの偉大な功績を思い知らされました。僕もいっぺんでいいから長井さんとお酒を飲んでみたかったです。

●魚喃キリコ

　私は長井さんにお会いしたことはないのですが、とても楽しいお話をしたように錯覚するのは、写真の中の長井さんがいつもとてもやさしく笑っていたからだと思います。

　心よりご冥福をお祈りいたします。

●ありがとうございました。

小西昌幸（先鋭疾風社代表）

私は『ガロ』を1966年12月号から殆どずっと読んでいます。十数年前、雑誌の編集姿勢などについて色々思うことがあり直接長井さんにお話を聞こうと考え、1981年5月1日に東京阿佐ケ谷の長井さんのご自宅にお邪魔し、インタビューさせていただきました。インタビュー前半は私のミニコミ『ハードスタッフ』10号に掲載し大きな反響がありました。ところが私の怠慢で作業がはかどらず、11号発行までに10年を費やしてしまいました。インタビュー後半を掲載した11号は1993年の暮れに完成し、勿論長井さんには編集部気付で7冊ほどお送りさせていただきました。

遅れたおわびを直接お伝えしようと考えましたが、編集部の人のお話では、長井さんは最近は青林堂には来られないとのことでした。私は、この2年ほど松沢呉一さんと親しくさせていただいていますので、この次上京する機会にでも氏に長井さんのご自宅へ連れていってもらい、直接長井さんにインタビューのお礼と遅れたおわびをしようなどと、勝手なことを考えていました。そんな矢先の訃報でした。悔やまれてなりません。

私は、最近、職場（公立文化施設）で私が作っていた広報の裏面1面を費やして追悼の文章を書きました（「創世ホール通信」13号）。そこでも書きましたが、直接でないにせよ、元気な内に11号をお届けできたことがせめてもの慰めでした。

長井さん、本当に長い間、ご苦労さまでした。長井勝一インタビューは『ハードスタッフ』にとって生涯の誇りです。その節は本当にありがとうございました。

●実相寺昭雄

合掌、戦跡か、
馬路か、伽旅か、原炉か、
臥占か、牙房か、……
ガロは生きつづける
実相寺昭雄

●唐十郎

長井編集長の逝去、心より残念に思います。僕の20代は、ガロとともにあり、毎月出る本の、名作を胸に、友人と語り、飲みあかしたものです。それは、全く、事件と呼ぶにふさわしかった出会いです。

おにぎりに一度、長井氏は紹介されましたが、言葉多く語れなかったことを悔しく思っています。とあれガロのメモリーは、千紫万紅ですので、それを振り返ることで耐えましょう。

●松本隆

ぼくが青春時代をすごした六〇年代後半から七〇年代前半にかけて、ガロは教科書みたいなものでした。若い世代の文化を牽引する機関車のようでした。

ぼくは一読者に過ぎなかったけれど、同世代に「日本語のロック」を創造する過程で、言葉に表せないほどたくさんの影響をガロからもらった気がします。

つげ義春さんと永島慎二さんの両巨星を中心に、無数の星が銀河のようにぼくらの頭上にきらめいていました。

あの時漫画の世界がすでに到達していた次元にまで、なんとか音楽を高めようと、ぼくも必死で歌の詩を創っていた気がします。

だからガロがなかったら「はっぴいえんど」も生まれなかったかもしれない。ほんとうにほんとうに感謝しています。

●なぎら健壱

白土三平さんの漫画が好きで『ガロ』は創刊当時から読んでおりましたし、それ以前の長井さんが発行をしていた本も読んでおりました。平素から長井さんの漫画界に残した足跡は一言では言い尽くせないものがあると考えておりましたが、そんな長井さんの悲報を耳にしたとき、なんとなく力が抜けていくのが分かりました。それというのも『ガロ』執筆作品に触発され、漫画を描いていた時代があり、またそれが自分の一番多感な思い出

深い時期でもあると思っております。

そんな頃、73年頃だと記憶しますが、吉祥寺の『ぐゎらんどう』で長井さんの姿を見かけたことがありました。グラスを片手に、ウンウンと若い者の話にうなずいていたのを思い出します。遠くからその姿をながめ、声もかけられなかったのが今となっては残念でなりません。

あちらの世界では先に何人もの先輩漫画家の方が行っていると思いますので、向こうでのんびり雑誌の発行なんぞをやって下さい。

ご冥福をお祈りします。

●関川夏央

私自身は長井さんと深いつきあいはない。しかし、一九七四、五年頃、南伸坊を訪ねてよく青林堂に行ったから、自然顔見知りになった。彼はいつも小さなテーブルを前に、椅子の上にあぐらをかいてすわり、伝票の勘定をしていた。昨年、『諸君』のグラビアの旧友再会みたいな企画で、南伸坊、呉智英といっしょに旧編集室に撮影に行ったが、そこはまったく昔とおなじたたずまいで、長井さんが伝票をいじっていないのが不思議なくらいだった。長井さんの死は日航の飛行機でもらった新聞で知った。ジャカルタ空港で放心したときも南、呉ノ両氏といっしょだったのは、まさに因縁である。

●大島渚

貸本「忍者武芸帳」をはじめ長井さんが出された数々の本はいつも困難の中でしか映画をつくることの出来なかった私の心のなぐさめでありました。深い感謝を捧げます。

●中野晴行

1月9日、籠目舎の伊藤徹氏から「これ内緒やなんけど、長井さんが死にはってん」という電話。「マスコミにも秘密らしいから、絶対言わんといてな」と慌ただしく電話は切れましたが、どうもぴんときません。「長井さんて、どの長井さんや?」

翌日、内緒のはずの訃報は朝刊に大きく載っていました。でも、なんだか信じられない気がしたのです。

自分と長井さんとは直接の接点はありません。一度だけ、予約した「虫の標本箱」がいつまでたっても発行されないのにしびれをきらして苦情の電話をしたとき、長井さんが電話口に出てくれたことがあっただけです。長井さんは、生意気な小僧っこに丁寧に遅れている事情を説明してくれました。それ以来、遠い存在の長井さんを妙に近しいものに感じるようになったのです。

昨年秋、伊藤氏と漫画研究のミニコミをつくることになり、巻頭インタビューをとるために、永島慎二先生にお会いした時にも、長井さんの話が出て、単に漫画家と編集者といった枠を越えたお二人の関係に触れたような気がしました。その後、関西で活躍されている漫画家の方たちを取材する仕事がはじまり、東元さんや、川崎ゆきおさん、森元暢之さんといった「ガロ」出身の描き手のみなさんのお話を聞く機会も得ました。実は、長井さんが亡くなった1月5日は、川崎さんとお会いしていたのです。長井さんの編集者としての才能、人間としての魅力はその方たちの証言からも再認識させられました。

「いつでも長井さんに見てもらえると思って安心してさぼっていたら、いなくなってた」しばらく、カットやイラストの仕事が続いていたという森元さんの言葉は胸にじんときました。春からストーリー漫画を再開しようという矢先だったそうです。

「放蕩息子がやっと故郷に帰って真面目になろうと決心したら親父が死んでいた。そんな感じです」

長井さんは、みんなにとっての親父だったかも知れません。

今日、再び伊藤氏から電話があり、2月の「偲ぶ会」ら一緒に行こうということになり

●早川義夫

僕の青春時代は
ガロと風月堂と
ビートルズでした。
早川義夫

ました。予約する飛行機の時間などを決めて電話を切ろうとすると、伊藤氏がぽつりと言いました。

「もうちょっと早く本を始めて長井さんの話も聞いておけば良かったかな」

これもまた繰り言です。

ご冥福をお祈りします。

●大塚浩司

子供の頃から、漫画家になりたかった僕が、ガロに作品を送ったのは、19才の時だ。永島慎二氏の作品にほれ込んでいた頃で、ガロ以外の本は読む気になれず、「ガロに入選したい」のが夢だった。

一作目は送ってから2週間で返送されて来た。めげずに描いた二作目は、2週間を過ぎても返ってこず、ドキドキしながら過ごした。

ある日、クラフト封筒に入った1980年11月号が送られて来た。

自分の絵がガロにのっている！　とてつもなく、うれしかった。

ガロに2本目がのった20才の時、青林堂を訪問した。「遠い所をどうも」と、長井氏にむかえられた。毎月20以上の作品応募の中で、選ばれたのはラッキーだと言ったら「ラッキーでのったのではない。いいものが作品にあるから、のったのだ」と話していただいた。3時間ほど話し、「上京したらいつでも寄りなさい」と見送られた。

あれから15年。漫画からはなれ、絵や、クラフトの仕事に進み、何度か賞をもらが、ガロに入選した時のよろこびに勝るものはない。何を作ろうとも、キラッと光るいい物があればやっていけるという自信は、長井氏におしえられたのだ。

クラフトの仕事の根っこの部分に、ガロとの関わりがあったことを、誇りに思います。

長井さん、ありがとうございました。

●篠原勝之

ビンボーとあり余るジカンを持てあましていたオレの三十代前半、劇画なるモノを描いていた頃もあった。何作かを当時の「ガロ」にのっけていただいたものだった。ビンボー出版社から小ゼニのギャラをむしり取っては呑んだくれ、今夜ここでのひと盛りとばかり酔っ払い、ビンボーを忘れるコトが出来たわい。ありがとうさんでした、長井勝一さん。

しかし、貴兄のビンボー菌がしみついた銭で呑んだオレは、ビンボーが人格にまで成長した次第である。あれからオレは劇画もやめちまい、鉄のゲージツ者になったんだ。貴兄から受けついだビンボーのタフさはこれから

も、オレのゲージツに生きていくだろう。ま、あの世があるんなら、オレもそのうち行くから、昔みたいに、ビンボー花見でもやるかい。
お疲れさんでした。
合掌

●船橋英雄

エロでもグロでもゲロでもないガロへと通ずるあの長くて急な暗い階段をただ一度上がらせてもらった通りすがりの者です。お世話になりました。
さようなら。

●山田勇男

子供の頃から漫画に魅せられてきた。あれこれ思い巡らすと、懐かしく、楽しかったり切ない思いがよみがえってくる。『ガロ』がなかったら、どんなにか淋しい漫画の世界だろう。それを築いた一人、長井勝一さんの存在は、ただならぬ存在で、亡くなられたのはなんとも残念でならないけれど、氏の意思は限りなく存在し続けると思っています。
ご冥福をお祈りいたします。

●原マスミ

けっきょく
学校で習った事の10倍も
ガロでおそわった事の方が
社会にでて役に立っています。
日本にガロが或る事と
ガロとはやくに出会えた
こどもの頃の運勢に感謝しています。

●斉藤哲夫

小学生の頃、僕の住んでいた大森にも数軒の貸本屋さんがあって、夕方になると自転車に乗って貸本屋さんのハシゴをしては、さいとう・たかを、影丸譲也、川崎のぼる、前谷惟光、白土三平さん等のマンガに胸踊らせたものだ。
あれから三〇年以上だった今でも、さいとう・たかをばりの劇画タッチの表情を描くことは、いとも容易いと僕は自負している。何せワラ半紙や文房具という文房具、教科書や下敷き、はてはランドセルにまで描きまくる程熱中していたのだから。
長井勝一様のご冥福をお祈り申し上げます。

●蔦木栄一、俊二（突然段ボール）

長井様とはお会いした事はなかったのですが、私達も畑は違いますが氏に肖り、でき

れば長く最後まで、自分の言い出した事、やり出した事に関わり続けたいものだと思っています。

御冥福を祈ります。

●長井さんの笑顔

大塚まさじ

長井さんにはじめてお会いしたのがいつだったのかは定かではない。しかし、場所ははっきりと憶えている。そこは、大阪の天王寺野外音楽堂で、70年から79年にかけて、5月のゴールデンウィークの何日間かおこなわれていたぼくらのお祭り的コンサート『春一番』の会場だった。多分、そこではじめてお会いしたはずなのに、ぼくはすでに長井さんの顔をよく知っていたように思う。『ガロ』で見かけたことがあったのか、それとも『春一番』の出演者でもあったシバ（三橋乙揶）に教えられたのか、今となってははっきりと思い出せない。自分の出番が終わり、客席へと降りていった時、そこに長井さんがおられた。ぼくはなにげなしに長井さんの隣に座りお話をした。長井さんのお連れは、若くてとても美しい女性だった。「大塚さんは若い女性に人気があるんですね、このこもあなたの大ファンらしいですよ」と、いきなり言われて驚いた。

次にお会いしたのは、それから何年かたった吉祥寺だった。ぼくは写真家の糸川燿史さんと一緒に旅をしていた時で、今はなき『ぐわらん堂』でうたった夜のことだったと思う。その時もお連れは若い女性だったが、前に会った人ではなかった。その夜、糸川さんは二人の写真を何枚も撮られた。長井さんが彼女の毛皮のコートを羽織り、『ぐわらん堂』のレトロな風景の中に二人ですっぽりとはまった写真がぼくは大好きで、そののちも時々眺めていた。その写真も、家の中のどこかにはあるのだろうが、今は見当たらない。でも、その時の長井さんの笑顔は、今もぼくの脳裏で生き続けている。

長井さんとは本当に何度かしかお会いしていない、にもかかわらずいつも身近な人でいて下さったのは長井さんの優しすぎる人柄によるものだろうか。会いたい、会いたい、と思いつつ会えずじまいになってしまったけれど、今も『ガロ』を見る度に長井さんの笑顔がぼくの中に蘇ってくる。

ありがとうございました。合掌。

●佐藤麻里

長井会長の訃報はやはりショックでした。はじめてまんがをガロに投稿した時、直接お電話をいただき、アドバイスとその頃まだ私

は塩釜に住んでいたので塩釜の様子を聞かれ…そんなお話もしました。とても短い電話でしたが忘れる事が出来ません。

その後、絵がらなども変わって私のまんがは会長に「キチガイ」の一言でかたづけられたという事ですが、それさえもはげみとなりました。

心から長井会長のご冥福をお祈りします。

●忌野清志郎

手紙ありがとうございます。ぼくはガロの大ファンでした。ぼくのことを忘れないでいてくれてうれしいです。2月13日までに返事（このハガキ）を出さねばならなかったのに受け取ったのが2月15日だったのです。ですから今（16日早朝）急いで書いています。

青林堂、つげ義春、白土三平、赤瀬川、水木しげる、シバ、フーテン、荒木、林静一、辰巳ヨシヒロ……、みんな俺のアイドルだ。編集長に感謝しています。

長井勝一さん、いままでずっとありがとう♥

●サエキけんぞう

編集部に遊びにいった小学生の僕に「まんじゅうを食うかい」とやさしくして下さったのを忘れません。後ろには楠勝平さんがいらっしゃいました。今後は貸本時代のお仕事の総集編が望まれます。

●平野勝之

がんばってください。

●菅野邦明

長井さん、長い間お勤めごくろうさまでした。なんかムショ帰りの人に言うアイサツみたいで申し訳ありませんが、本当にそんな感じです。

「ガロ」に執筆された多くの才能豊かなアブナイ作家達とお付き合いされ、お世話をされた長井さんの度量の広さにはとても感動してしまいます。あの小さな体のどこにそんな広い平原のような心があるのか。それはかつて満州で馬賊だったせいでしょうか。「ガロ」に掲載された作家達はとても個性の強い方ばかりです。多分いろんな御苦労もなさったことでしょう。そんな中で黙々と仕事をこなされ、飄々とされた生き方にはさわやかさを感じます。私も細々と20年位編集の仕事をしておりますが、長井さんは、まさに編集者の鏡であり、憧れでもあります。

長井さんは本当に人間が好きだったんでしょう。そして人間の可能性にとても興味があったんだろうと思います。それが「ガロ」には他の漫画誌では見られない、さまざまな人の生き方が掲載されているからです。

本当に長い間、ごくろうさまでした。

●Jerry

長井さんには一度もお会いする事ができないまま、こんな事になってしまい、残念に思ってます。

ご冥福を祈ります。

●長井さんのこと　加藤賢崇

長井さんの人となりに関しては、ガロ執筆者の様々な方の文章を読んで、お会いする前からすでに神話上の人物のようにイメージができあがっていたので、実際に動いて喋っているところを肉眼で見ても「ああ本で読んだ通りの」て感じで、なにか現実の風景じゃないような感じがしたのでした。

各界の方々から、ご多忙中にも関わらず長井さんのために、心のこもったお言葉をたくさんいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

月刊ガロ編集部一同